

[ライトノベル] おすすめリスト

SFファン交流会6月例会資料

タニグチリウイチ選　おすすめ10							
	『ブギーポップは笑わない』	上遠野 浩平	緒方 剛志	電撃文庫	KADOKAWA	1998/2/6	ヒーローなりヒロインといった主人公を軸に戦いからの成長を物語るという構図を捨て去り、断片としての状況を語りながら全体像を浮かび上がらせる手法の新斬さと日常にふつとのそく非日常への僅れを惹起させる設定の妙で他にないタイプの作品として関心を誘った。緒方剛志によるイラストと鎌部善彦による装丁もクールさと虚無さを合わせ漂わせる効果を増して新しい流れを感じさせた。
◎	『ネガティブハッピー・チェーンソーエッチ』	滝本 竜彦	安部吉俊	角川文庫	KADOKAWA	2004/6/25	作家エージェントという事業に乗り出した元早川書房の村上達朗が、デビュー前からエッセイを書かせていた三浦しをんをプロデビュースた後、サイトへの投稿を受けて読んで感し入るものがあり、構成を直しつつ学園小説大賞への応募という形で送り出した作品。ひきこもりざみで空回りする主人公とあがく少女という、続く作品でアニメにもなつてうちもファンの多い『NHKによろこそ』にも引き継がれるキャラクター配置の中で、どうにかして自分も足を踏み出したいと願う少年たちの気持ちを汲むストーリーが、水河船と呼ばれた時代に生きる者たちの共感を誘った。
	『猫の地球儀』	秋山 瑞人	椎名 優	メディアワークス	電撃文庫	2000/1/10	秋山瑞人というスタイリッシュでエキサイティングなストーリーテリングの才を、人類が宇宙へ出てあらに命断を絶った後のステーションに生きる猫たちというSF心をくすぐりまくる設定の上で描いて、ライトノベルの存在をSFプロパーにも知らしめた。
	『涼宮ハルヒの憂鬱』	谷川 流	いとう のいち	角川スニーカー文庫	KADOKAWA	2003/6/7	今でこそライトノベルの看板とも言える作品で、冗談ではなく300年後に出る文化史の本に登場する1冊になる作品だが、アニメ化によって描かれた突拍子もないキャラに振り回される周囲といった構図への関心が影らむ前は、強烈な理想が世界を変容させているにも関わらず、それに気づかない涼宮ハルヒという少女を、実は彼女が待ち望んでいた宇宙人未来人超能力者といった存在たちが正体を隠して見守り、想念が働き起こす騒動をカバーするという構図に、プロパーのSFファンからも怒られる人が続出した。筒井康隆が『涼宮ハルヒの消失』を褒めたのも、そうしたSFとしての面白さがあったからで、アニメ化によってライトノベルのカテゴリーが注目を集めたからではない。ただキャラの強さという部分に表現者として関心を持ったのが、自身でもライトノベルなるものを書くうとして『ピアンカ・オーバースタディ』を世に問うた。シリーズの方はと言えば、最新巻でもコスプレ的な面白さを感じる短編を繋げて長編にしてしまうあたりに、作者のSF魂の健在ぶりを伺える。そのペースでどんどん描いて欲しいのだけれど。
◎	『半分の月がのぼる空』	橋本紡	山本ケイジ	メディアワークス	電撃文庫	2003/10/10	『猫目狩り』や『リバーズ・エンド』のようなSFから離れ、作者が本来思考していた文芸の方に筆遣いを戻したような『毛布おぼけと金曜日の階段』をまず出して、ファンタジーでもSFでもない日常を舞台に生きづらさをかかえた若い人たちの白々を描いて、しっかりと小説になることを見せた橋本紡が、難病に冒されながらも明るく生きる少女と少年との出会いから始まる日々を描いて、青春ライトノベルというカテゴリーを確立させたこのシリーズ。この路線があったからこそライトノベルを卒業した大人を対象読者にしたメディアワークス文庫的なライト文芸系も生まれ、今やライトノベルのレーベルを書店の臨に追いやるくらいの勢力を持つようになった。そうした中、橋本紡本人は『ふられるよはは、君のことを』あたりを最後に小説家を辞めてしまつて10年以上が経過した。今どうしているのかと思わない日はない。
	『境界線上のホライゾン』	川上 稔	さとやす	KADOKAWA/アスキー・メディアワークス	電撃文庫	2008/9/10	1冊がそれぞれ1000ページを超えることもあるくそ分厚い本が何十冊と連なるシリーズというだけで国宝級。読む人は選びそうだが登場するキャラクターたちについてとつとなく細かな設定があつて、実際の歴史に題材を取つたエピソードがそうしたキャラによって新鮮な結びついていく楽しさもあつて、いったんハマればそうした関係性を追いつつと次にどうなるかが気になって読まざるを得なくなる。新刊が出れば1000ページでも一気読みした日々が懐かしい。
◎	『りゅうおうのおしごと』	白鳥 士郎	しらび	SBクリエイティブ	GA文庫	2015/9/11	ロリ心を誘う『ロウきゅーぶ』の将棋版かと思わせて、将棋という世界をここまでしっかり描き抜いた小説は一級文芸系も含めてあまりない。プロ棋士の凄みであり誇りになった棋士の去り際でありといった”将棋あるある”に触れており、とりわけ女流棋士に関して仕組みとしていわゆるプロ棋士ではないという立場をしっかりと指摘しつつ、そうした構造がどのような影響をもたらししているのか、どのような打開策が採られているのかといったことを想起させて将棋界への関心を惹起させた。加えてAIの台頭というテーマについてももしっかりと描み、それがもたらす影響についても指摘。その上で人間の棋士がどうして必要なのか、人間には何ができるのかを描いてのけたところもあつて引き付けられた。藤井聡太の登場によって時代に追い越されたと自虐的に語られるが、それはすなわち時代を先取りしていたということでもある。女性のプロ棋士誕生もいずれ実現するだろう。
	〈飛空士〉シリーズ	犬村小六	森沢晴行	小学館	ガガガ文庫	2009/2/18	世界を構築する手腕に長けた作家で世界が上層中層下層に分断されてその間の行き来も困難な世界の上で繰り広げられる『やがて恐るるヴィヴィ・レイン』とか最高に面白いが1人の作家で紹介できる作品数の制限もあつて入れられなかったのが残念。
	『シュガーダーク 埋められた闇と少女』	新井円侍	mebae	角川書店 角川グループパブリッシング	角川スニーカー文庫	2009/11/28	ハルヒで注目されたスニーカー大賞から出た作品だけに注目されたし前宣伝も凄かったし実際に改めて読んで得の知れないものを作る量産型少女とそれを見守る元兵士といった関係性にソクソクさせられたが、気になっていた続きは描かれず作者も長く沈黙。講談社ラノベ文庫から違う作品を数巻出して以後、消息も聞かないが、改めて読むと『シュガーダーク』のスプリングさでありキャラクターの存在感はなかなかのもの。作家として育っていないことが実にもったいない。振り返ればもうこの頃からスニーカー大賞の受賞作がハルヒほど盛り上がることもなくなった。
	『死亡遊戯で飯を食う。』	鶴岡有志	ねこめたる	KADOKAWA	MF文庫J	2022/11/25	異世界転生とかVRMMOだとかが溢れかえる小説投稿サイト発のライトノベル作品のラインアップにあつて、これもまた人気ジャンルのひとつともいえるスゴクメ的な設定を持ちながらも、どこか虚無感を漂わせる雰囲気と淡々とした文体によって異彩を放ち注目を誘いアニメ化によってさらに大きく話題となった。金のために少女たちが戦うという残酷極まりない設定を淡々と積み上げていってスリルを味わわせてくれるという冷ややかな読み味が特徴的。ねこめたるによる絵もそうしたクールで退廃的な雰囲気をよく表していた。アニメがまたそうした雰囲気を実によく捉えていた。

細谷正充選　おすすめ10							
◎	『ハレーション・ゴースト』	笹本祐一	平野俊弘	朝日ソノラマ	ソノラマ文庫	1985/1/30	選んだ理由は「ライトノベルとの出会い」に書いてあります。この作品はシリーズ第2弾ですが、とにかく好き。笹本版『ビューティフル・ドリーマ』ですが、それもよかった。
	『リパティ・ランドの鐘』	秋山完	鈴木雅久	朝日ソノラマ	ソノラマ文庫	1996/1/31	秋山作品はすべて好きだけど、その中でも特に好きな作品。人間を護るため戦つて壊れていく、アニメトロイドたちの活躍が、痛快であり切ない。
	「キマイラ・吼」シリーズ	夢枕獏	天野喜孝	朝日ソノラマ・他	ソノラマ文庫文庫	1982/7/30～	はじめて読んだときの興奮は忘れ難いですね。まさか、まだ完結しないとは思ひもしませんでした。
	『妖神グルメ』	菊地秀行	天野喜孝	朝日ソノラマ	ソノラマ文庫	1984/6/30	はじめて読んだときは、変な話だと思いました。作品の真面目に気づいたのは、後になってからです。この作品があったからこそ、日本のクトゥール神話物は、何でもありになりました。
	『HAY!スピルバーク』	小林弘利	和田まこと	角川書店	角川スニーカー文庫	1988/5/1	誰も挙げないだろうから入れてみました。スルバークが1938年のハリウッドにタイムスリップして、ドタバタを繰り広げる。昔のハリウッド映画好きなので欣賞価値でした。フレッド・アステアが出てくるのが嬉しい。デビュ作にしてシリーズ第1弾となった『パンツァーポリス1935』はそれほどでもなかったけど、第2弾の『エアリアルシティ』から惚れこんだ。好きなのは『風水街都 香港』と『機甲都市 伯林』。読んでいる間、とにかく興奮しました。
◎	『都市』シリーズ	川上稔	さとやす・他	主婦の友社	メディアワークス文庫	1997/1/25～	時代物もひとつ入れておこう。明治の世で、元新選組隊士と、死から蘇った隊士が戦う。まあ、山田風太郎の『忍法魔界転生』ですが、それを新選組でやったところが面白いですね。3冊で刊行が止まり、おそらく未完のままでしょうが、いつまでも続刊を待っています。
◎	『鬼神新選』	出海まこと	ヤスダスズヒト	主婦の友社	メディアワークス文庫文庫	2003/7/25～	驚異する作品。なんとなく読み始め、最初はソコソコ面白いと思っていただけでしたが、第3巻の途中から急激に面白さ爆上げ。特に最終巻の終盤の展開は、心が震える。ここだけ最低でも、年に1回は読み返しています。
	『戦国城塞マストラ』	林トモアキ	上田夢人	角川書店	角川スニーカー文庫	2006/11/1～09/1/1	異世界戦記。戦争が始まるまで3巻をかける、じっくり興味が索晴らしいですね。戦争の手続きを、こんなに詳しく書いたライトノベルは稀でしょう。主人公がオークで、敵国がエルフというのも宜しいですね。
	『オルクセン王国史』	樽見京一郎	THORES紫木	一二三書房	サーガフォレスト	2023/12/15～	威勢のいい異世界ファンタジー。対人戦が多いのが嬉しい。人がガンガン死ぬ話はいいねえ。
	『魔女と傭兵』	超法規的かえる	AFTERGLOW	マイクログانジ社	GCN文庫	2023/5/27～	現代ダンジョン配信物。このジャンルの中で一番好き。作者のキレキレかつ時に下品なギャグと、常に読者の予想の斜め上の展開が笑える。

三村美衣選　おすすめ10							
☆	妖神作戦	笹本祐一	若菜等/平野俊弘	朝日ソノラマ	ソノラマ文庫	1984/8/31	初版がソノラマ文庫から1984年に発売された。全4巻。1994年に新装版（画：御米権）、2011年に創元SF文庫（画：DK/装幀岩郷重力+WONDER WORKZ）よりシリーズが再刊
	アルスラーン戦記	田中芳樹	天野喜孝	角川書店	角川文庫	1986/08/13	1986年の第1巻『王都炎上』の刊行から31年の歳月を経て、2017年12月発売の第16巻『天蓋無限』をもって完結。荒川弘が手掛けるコミック版が『別冊少年マガジン』に連載中。コミックス22巻くらいから原作とは異なる展開になっているらしい。2015年「アルスラーン戦記」（全25話）、2016年「アルスラーン戦記 風塵乱舞」（全8話）テレビアニメ化。
◎	ブラックロッド	古橋秀之	雨宮慶太	KADOKAWA(アスキー・メディアワークス)	電撃文庫	1997/4/10	2023年に「ブラックロッド復刊プロジェクト」により、「ブラックロッド」、続編「ブラッドジャケット」、「ブラインドフォーチュン・ピスット（ブライトライツ・ホーリーランド（改題）」三部作合本。https://soreosu.com/projects/blackrod
	悪魔のミカタ	うえお久光	藤田香	メディアワークス	電撃文庫	2002/2/10	第8回電撃ゲーム小説大賞で銀賞を受賞。
◎	Missing	甲田 学人	翠川 しん	メディアワークス	電撃文庫	2001/7/10	日本の伝奇ホラー小説シリーズ（イラスト：翠川しん/花邑まい）。累計部数は150万部を突破、電撃文庫やメディアワークス文庫（新装版）から全13巻。
◎	BLACK BLOOD BROTHERS	あざの耕平	草河遊也	富士見書房	富士見ファンタジア文庫	2004/7/16	1990年代～2000年代のライトノベルを代表する、吸血鬼アクションの傑作。本編11巻・短編集6巻の計17冊にて完結。2006年にTVアニメ化（全12話）。
	戦う司書	山形石雄	前嶋重機	集英社	スーパーダッシュ文	2005/9/22	第4回スーパーダッシュ小説新人賞「大賞」を受賞したデビュー作。全10巻で完結。2009年に「戦う司書 The Book of Bantorra」テレビアニメ化
	七姫物語	高野和	尾谷おさむ	メディアワークス	電撃文庫	2003/2/10	第9回電撃ゲーム小説大賞「金賞」受賞作。
	Babel	古宮九時	森沢晴行	KADOKAWA	電撃の新文芸	2020/6/17	全4巻で完結。「このライトノベルがすごい!2021」単行本・ノベルズ部門5位。
	春夏秋冬代行者	曉佳奈	スオウ	KADOKAWA	電撃文庫	2021/4/9	全8冊。2026年「春夏秋冬代行者 春の舞」テレビアニメ化。